三陸の近景 ⑰ 共に生きる（最終回）

３年半の仮設住宅訪問活動では、実にさまざまな出会いがありました。その中でも次に紹介する女性とのやり取りは特に印象深いものでした。

「こんなところに３年半も閉じ込められて、頭がおかしくならないほうがおかしい」

「いかがお過ごしですか」という私の言葉に対する返答でした。強い語気で発せられたその言葉には、「いかがですかも何も、応急の仮設住宅に３年半も住み続けている私の気持ち、あなたにわかる!?」という気持ちが伝わってくるようでした。

想像力を欠いた私の言葉は、その方に嫌な思いをさせてしまったように思います。それでもその気持ちを何とか感じ取ろうと言葉を交わしながら時間を共にする中で、その女性は「もういい加減、夫と別れたい」「これ以上、一緒に住めない」とおっしゃいました。その気持ちが私の心に強く伝わり一緒になって悩み考えました。

いろいろなことを話してしばらくしてから、突然「こんな愚痴も、赤の他人だから話せるんだろうね」とこぼされたのです。

訪問活動をする金澤さん（左）
写真と本文は関係ありません

伺うとその方は、決して話をする相手がいないわけではないようです。しかし「友人や知り合いだと、気持ちをわかってもらいにくい。事情がわかるから解決策ばかり提示される」のだそうです。欲しいのは解決策ではなかったのです。

◇

女性は「問題に対して同じ方向を向いてもらうこと、共に悩んでもらえることがうれしい」と語られました。訪問した直後の寂しそうな険しい表情から比べると、ずいぶんと安心した表情になっておられました。こうした気持ちの変化にこそ訪問活動の意義を強く感じます。

このことから、一人で抱えきれないほどの苦悩を抱える目の前の方と、同じ方向を向く、共に悩むことには、大きな意味があるのだと実感しました。一人きりで苦悩することは孤独です。そして、大きな孤独感を持った人にとって、そこから抜け出すためには、まず一人目の温かな存在こそが必要とされているからです。

多くの人に囲まれていたとしても一人きりで苦悩する方にとって、一人目の温かな存在になるために、地元の相談員の方と共に訪問活動を続けたいと思います。

◇

いまだ余震が続く中、東日本大震災の多くのご遺族は48回目の月命日を迎えられます。これからも被災された方の心にチームで関わり続けていきたいと思います。

（本願寺派総合研究所研究員・金澤豊）

※本連載のバックナンバーは、総合研究所ホームページに掲載しています。